

なぜ人は攻撃するのか

——攻撃性と愛着スタイル及び防衛機制との関連——

岡田 博名*・桂田恵美子**

抄録：本研究は「人はなぜ攻撃するのか」という人間の攻撃性をテーマに、攻撃性を愛着スタイル及び防衛機制との関連から検討した。先行研究を基に1. 攻撃性と防衛機制は深く関連している、2. 愛着スタイルと攻撃性及び防衛機制には関連があり、愛着スタイルが不安定な人ほど攻撃性及び未熟な防衛が高い、という2つの仮説をたてて検証した。大学生395名を対象に質問紙調査を行った結果、どちらの仮説も支持された。また、現代青年が攻撃的になる要因として最も大きいものは「攻撃されるとあからさまに攻撃的になる」という防衛機制であった。そして防衛機制と攻撃性に関連が見られたことから、自己を防衛するために攻撃性を手段として用いる傾向が示唆された。

キーワード：攻撃性、愛着スタイル、防衛機制、大学生

I. 問題と目的

現代社会では「攻撃」が日常的に見られる現象であることを否定する人はいないだろう。テレビや雑誌などのメディアにより、いじめ、幼児虐待、夫婦間暴力(DV)などの攻撃行動が我々の生活に浸透していることがわかる。これらの攻撃行動を直接経験してこなかったとしても、ほとんどの人が侮辱などの言語的な攻撃、拒否・否定などの敵意的な攻撃といったかたちの攻撃を経験したことがあるだろう。

本研究の対象者は青年期の大学生であるが、人としての社会的適応を求められる青年期では、反社会的な攻撃行動は減るが、だからといって内に秘めた攻撃性も減るとは限らない。それでは、攻撃性とは何をさすのか。大淵・北村・織田・市原(1994)は、他者に身体的、心理的に苦痛を与える行為、また、それを願望する内的状態を攻撃的な反応とし、他の人々や出来事などの一定の刺激に対し攻撃的に反応する傾向があることを攻撃性と定義した。

大淵ら(1994)は、攻撃性を測定するための多数の尺度が存在し、攻撃性は複数のカテゴリーに分類でき、多くの側面からなる特性であることを示した。そのような複合的な特性としてとらえられている攻撃性が、どのような要因と深く関連しているのか追究することは、攻撃性をより明らかにすることに貢献すると考える。

古くから現在に至るまで、「なぜ人は攻撃するのか」といった攻撃性の本質をテーマとして、人間の攻撃性に関する研究は数多く行われてきた。中でも、攻撃性とその他のパーソナリティ特性との関連性を検討する研究は多数ある。

愛着スタイルとの関連から攻撃性を検討する先行研究も主要な研究アプローチのうちのひとつである。Bowlbyの愛着理論では、人は乳・幼児期に主要な養育者(主に母親)との相互作用によって愛着スタイルを形成し、その後愛着スタイルは内的作業モデル(Internal Working Model)として個人に内在化され、対人関係等に影響すると言われている(尾崎・杉本, 2007)。尾崎・杉本(2007)は愛着理論に基づいて青年期における愛着と攻撃性との関連について研究した。その結果、愛着安定型は人を攻撃するほどの怒りをあまりもたず自分の中で怒りをうまく処理し、自分の意見をはっきり言うことが示された。また、両価型は怒りの表出が高く、自分が拒否されたような相手の反応に対して敵意や不満を抱き、回避型は、怒りの抑圧が高いが、身体的攻撃も高く攻撃の表出は身体的となる、などの結果が示された。この尾崎らの研究結果をふまえ、工藤(2006)は別の成人愛着スタイル尺度と、投影法による攻撃性の測定方法を用いて両者の関連を検討した。その結果、他者への不信感と自尊心の低さからなる内的作業モデルをもつ恐れ型は、愛情がなくなることを恐れて抗議することや主張をもつことが困難であることが示唆された。そして、直接的にも間接的にも攻撃行動を外界や他者に示さず、潜在的に攻撃性、特にその防衛的側面を抑圧するが、他者との関係が危機的になり自己の防衛が破綻の脅威にさらされると逆に制御不能な激しい攻撃性を表出する可能性があることも示された。

朝長・福井・地頭・中村・小原・柳田(2010)の研究では、大学一年生を対象に攻撃性を身体的攻撃、言語的攻撃、短気及び敵意の4つの特性から検討した結果、男女とも敵意が最も高く、身体的攻撃においては男子学生

*関西学院大学文学部

**関西学院大学文学部教授

が女子学生よりも高いという性差も示された。

また、工藤 (2006) の研究から、愛着タイプによって他者や外界に対して親密な関係を攻撃的に拒むことで自己を防衛するタイプがいることが明らかにされ、葛藤状況やネガティブな状況下では、どの愛着スタイルを持つ者も防衛機制を働かせているが、その用いる防衛機制の内容は異なること (工藤, 2002) が示されている。防衛機制とはフロイトが提唱した概念であり、感情や考えや記憶を無意識または意識的な心理操作によって、無意識下へ押しやったり歪めたりして欲求不満な状態を緩和、回避することで自らが傷つくのを防衛する人の機能である (蓮花, 2008)。

蓮花 (2008) は、青年期と成人期の男女を対象として、愛着スタイル特有の防衛スタイルについて実証的に明らかにすることを目的とした研究を行った。その結果、愛着スタイルと防衛スタイルの間には関連が認められた。愛着スタイルの両因子である見捨てられ不安の高い人も親密性の回避の高い人も、未熟な防衛スタイルとの関連が強いということが明らかになった。また、安定した愛着スタイルをもつ人と不安定な愛着スタイルをもつ人の用いる防衛スタイルには明らかな差があることが報告されている。

以上の先行研究により、愛着と攻撃性、愛着と防衛機制には関連があることが明らかになっている。このことから、攻撃性と防衛機制も関連があることが示唆される。しかし、攻撃性と防衛機制との関連を検討した実証的な研究がほとんど見当たらないため、本研究では、攻撃性を愛着スタイルと、防衛機制もまじえて検討することを目的とする。

本研究では先行研究の結果を基にして以下の2つの仮説をたてた。

- (1) 攻撃性と防衛機制は深く関連している。
- (2) 愛着スタイルと攻撃性及び防衛機制には関連があり、愛着スタイルが不安定な人ほど攻撃性及び未熟な防衛機制が高い。

II. 方 法

1. 対象者

対象者は関西学院大学の大学生 (文学部, 経済学部, 社会学部, 人間福祉学部, 法学部) 395名であった (男性139名, 女性256名)。平均年齢は20.1歳 (範囲=18歳~28歳) であった。

2. 調査内容

- (1) 攻撃性指標：敵意的攻撃インベントリー (奏, 1990)

パス・デューキー敵意インベントリーをもとに、奏 (1990) が日本語版を作成したものである。この尺度は

6つの下位尺度54項目から構成されているが、6つ目の下位尺度である、「攻撃の置き換え」については、 α 係数が.02や-.02といった低さであったことが報告されている。その為、本研究ではこの下位尺度を除き、1. 身体的暴力 (「私は思わず暴力を振ってしまうことが時々ある」など) 10項目、2. 敵意 (「私の陰口を言う人がいると思う」など) 10項目、3. いらだち (「私はよくイライラする」など) 8項目、4. 言語的攻撃 (「私は言い争いをよくする」など) 8項目、5. 間接的攻撃 (「私は知ったかぶりをする人には、わざと色々なことを聞いて困らせる」など) 10項目、の合計5下位尺度46項目を使用した。それぞれの項目に5件法で回答を求め、得点が高いほど、特性が強いことを示す。各下位尺度の内的整合性を示すCronbachの α 係数は、身体的攻撃が.83、いらだちは.82であり、敵意が.79、間接的攻撃が.74、言語的攻撃が.68と報告されている (奏, 1990)。

- (2) 愛着スタイル指標：成人版愛着スタイル尺度 (訛摩・戸田, 1988)

Hazan & Shaverが1987年に開発し、訛摩・戸田 (1988) が多少修正して邦訳したものを使用した。この尺度は、安定型 (Secure Attachment)、回避型 (Avoidant Attachment)、両価型 (Anxious/Ambivalent Attachment) の3つのタイプの特徴を示す記述を読んで、自分に最も良く当てはまると思うタイプを1つだけ選択するというものである。

- (3) 防衛スタイル指標：The Defense Style Questionnaire 日本語版 (中西, 1998；以下DSQ-42とする)

Andrew, Singh & Bondが作成したDefense Style Questionnaire (DSQ) を参考に中西 (1998) が作成した日本語版を使用した。この尺度は防衛機制を直接測定するわけではなく、外からの刺激への対応の自己評価によって、無意識に機能する防衛機制を探るものである。防衛スタイル尺度の日本語版DSQ 42は質問項目が88あった1984年版のDSQの改良版をもとに作成された (中西, 1998)。DSQ-42は未熟な防衛、神経症的な防衛、成熟した防衛の3つの防衛スタイルに分類されており、未熟な防衛12下位尺度、神経症的な防衛4下位尺度、成熟した防衛4下位尺度からなるが、本研究で使用したのは、中西が作成したDSQ-42のうち、未熟な防衛スタイルの12下位尺度であった。12の下位尺度 (1. 投影, 2. 受動攻撃, 3. 行動化, 4. 隔離, 5. 価値下げ, 6. 自閉的空想, 7. 否認, 8. 置き換え, 9. 解離, 10. 分裂, 11. 合理化, 12. 身体化) はそれぞれ2項目から成る。項目例としては、投影「人に利用されることが多い」、受動攻撃「もし上司が私をイライラさせたら、仕事でわざとミスしたり、ゆっくりやったりして仕返する」、行動化「傷つけられると、あからさまに攻撃的に

なる」などがある。各項目に対し1「私に全然当てはまらない」から9「私に全く当てはまる」までの9件法で回答を求めた。得点が高いほど、特性が強いことを示す。この未熟な防衛尺度の α 係数は.75であると報告されている(蓮花, 2008)。十分に高い値ではないが, DSQは標準化された防衛機制尺度であり, 先行研究により, 一定の妥当性も確認されている(蓮花, 2008)ため, 本研究ではDSQ-42を用いることにした。

3. 手続き

大学の講義授業において, 授業担当教授の了解を得た上で講義時間の一部を使い調査を実施した。調査票は無記名であり, 所要時間は約15分であった。データ収集期間は2012年9月中旬から11月末であった。

III. 結果

1. 愛着スタイルについて

安定型を選択した者は216名(男性79名, 女性137名)で全体の54.7%, 回避型を選択した者は105名(男性33名, 女性72名)で全体の26.6%, 両価型を選択した者は74名(27名, 女性47名)で全体の18.7%であった。安定型が最も多く, 次に回避型, 最後に両価型という結果になった。また, 愛着スタイルに男女差があるかどうかを検討するため, カイ二乗検定を行ったところ, 有意な差は示されなかった($\chi^2(393) = 0.78, n.s.$)。

2. 攻撃性及び防衛機制の性差について

先行研究において攻撃性の性差が報告されていたので, その確認のため本研究においても性差を検討した。対応のない t 検定を行ったところ, 攻撃性下位尺度の身体的攻撃($t(393) = 3.00, p < .05$), 間接的攻撃($t(393) = 15.44, p < .05$), 言語的攻撃($t(393) = 4.28, p < .05$), いらだち($t(393) = -2.69, p < .01$)において有意な差が示された。身体的攻撃, 間接的攻撃, 言語的攻撃は男性の方が高く, いらだちでは女性のほうが高いことが明らかになった(Table 1参照)。

次に防衛機制に男女差があるかどうかを検討するため, 対応のない t 検定を行ったところ, 防衛機制下位尺度の受動攻撃($t(393) = 4.75, p < .05$), 価値下げ($t(393) = 10.10, p < .05$), 否認($t(393) = 14.02, p < .05$), 置き換え($t(393) = -4.36, p < .01$), 身体化($t(393) = -3.30, p < .01$)において有意な差が示された。受動攻撃, 価値下げ, 否認は男性の方が高く, 置き換え, 身体化では女性のほうが高いことが明らかになった(Table 2参照)。

3. 攻撃性と防衛機制との関連

攻撃性と未熟な防衛機制に関連があるかどうかを明ら

Table 1 攻撃性下位尺度と性差の平均値 (SD)

	男性	女性	t 値
身体的	22.5(7.79)	20.1(7.42)	3.00*
敵意	31.8(6.76)	30.4(6.87)	n.s.
いらだち	20.2(6.95)	22.3(7.44)	-2.69**
言語的	20.2(5.86)	18.5(6.44)	4.28*
間接的	26.4(6.62)	23.3(6.58)	15.44*

** $p < .001$ * $p < .05$

Table 2 防衛機制下位尺度と性差の平均値 (SD)

	男性	女性	t 値
投影	8.2(3.42)	7.7(3.04)	n.s.
受動攻撃	8.3(3.41)	7.5(2.85)	4.65*
行動化	9.2(3.94)	9.6(3.60)	n.s.
隔離	9.2(3.56)	8.8(3.87)	n.s.
価値下げ	8.8(3.35)	8.0(3.06)	10.10*
自閉的	8.2(4.06)	8.3(4.08)	n.s.
否認	7.0(3.09)	5.8(2.94)	14.02*
置き換え	7.2(3.33)	8.8(3.42)	-4.36**
解離	6.7(3.40)	6.4(3.15)	n.s.
分裂	7.8(3.93)	7.5(3.59)	n.s.
合理化	11.2(3.34)	10.9(2.81)	n.s.
身体化	7.8(3.97)	9.2(3.98)	-3.30**

** $p < .001$ * $p < .05$

Table 3 攻撃性と防衛機制との相関

	身体的	敵意	いらだち	言語的	間接的
行動化	0.32	0.33	0.40	0.31	0.35
投影		0.46			
受動攻撃		0.31			0.35
価値下げ		0.40			

注: 相関係数は全て1%水準で有意である(両側)。

かにするために, *Pearson* の積率相関係数を算出した。まず, 未熟な防衛総得点と攻撃性総得点の相関を見たところ, 弱い正の相関が見られた($r = .35, p < .01$)。その後, 下位尺度同士の相関を見ると, 多数の有意な相関が見られた。しかし, ここでは, 実質的な相関を考慮し, 統計的に有意で且つ相関係数が.30以上の相関についてのみ報告する。未熟な防衛スタイルの「行動化」はすべての攻撃性下位尺度と中程度から弱い正の相関を示した(Table 3参照)。また, 有意な相関が出た未熟な防衛スタイルの下位尺度全て(行動化, 投影, 受動攻撃, 価値下げ)が攻撃性下位尺度の敵意と中程度から弱い正の相関を示した(Table 3参照)。

4. 愛着スタイルと攻撃性・防衛機制の関連

愛着スタイルにおいて性差は見られなかったが, 攻撃行動や防衛機制の下位尺度において性差が見られたため, 性別と愛着スタイルを独立変数とし, 攻撃性の各下位尺度得点を従属変数とする2要因分散分析を行った。その結果, いずれの下位尺度においても交互作用はみら

れなかった。しかし、攻撃性下位尺度の敵意、いらだち、間接的攻撃において愛着スタイルの有意な主効果が見られた（順に $F(2,392) = 26.56, p < .01$; $F(2,392) = 14.91, p < .01$; $F(2,392) = 6.75, p < .01$ ）。Tukey の HSD 法を用いた多重比較の結果、いずれも安定型の愛着スタイルの人は、回避型や両価型の人よりも攻撃性が有意に低かったが、回避型と両価型の間には有意差は見られなかった（Table 4 参照）。性別においても主効果がみられたが上記の t 検定と同じであった（詳細は Table 1 参照）。

同様に、性別と愛着スタイルを独立変数とし、防衛機制の各下位尺度得点を従属変数とする 2 要因分散分析を行った。その結果、いずれの下位尺度においても交互作用はみられなかった。しかし、未熟な防衛下位尺度の投影、受動攻撃、行動化、隔離、価値下げ、自閉的空想、置き換え、合理化、身体化において愛着スタイルの有意な主効果が見られた（順に $F(2,392) = 11.01, p < .01$; $F(2,392) = 4.75, p < .01$; $F(2,392) = 4.76, p < .01$; $F(2,392) = 15.33, p < .01$; $F(2,392) = 28.75, p < .01$; $p < .01$; $F(2,392) = 4.76, p < .01$; $F(2,392) = 15.33, p < .01$; $F(2,392) = 28.75, p < .01$; $F(2,392) = 12.66, p$

Table 4 愛着スタイル別攻撃性下位尺度得点の平均値 (SD)

	安定型	回避型	両価型	F 値
身体的	20.4(7.56)	20.8(7.50)	22.7(7.86)	<i>n.s.</i>
敵意	28.8(6.53)a	32.7(6.42)b	34.4(6.27)b	26.56**
いらだち	19.8(6.93)a	23.1(7.43)b	24.4(7.05)b	14.91**
言語的	19.6(6.41)	18.2(6.07)	18.8(6.10)	<i>n.s.</i>
間接的	23.3(6.96)a	25.8(6.10)b	25.7(6.52)b	6.75*

注：同じアルファベットは多重比較で同じグループに所属することを示す。

** $p < .001$ * $p < .05$

Table 5 愛着スタイル別未熟な防衛下位尺度得点の平均値 (SD)

	安定型	回避型	両価型	F 値
投影	7.2(2.46)a	8.4(3.54)b	9.1(3.34)b	11.01**
受動攻撃	7.3(3.04)a	8.2(2.84)b	8.4(3.35)b	4.75**
行動化	8.9(3.73)a	9.9(3.64)b	10.5(3.58)b	4.76**
隔離	8.0(3.70)a	10.5(3.23)b	9.4(3.87)b	15.33**
価値下げ	7.3(3.04)a	9.6(2.84)b	9.1(3.10)b	28.75**
自閉的	7.3(3.51)a	9.6(4.26)b	9.1(4.59)b	12.66**
否認	6.3(3.08)	5.8(2.72)	6.3(3.37)	<i>n.s.</i>
置き換え	7.8(3.26)a	8.8(3.77)b	8.8(3.45)b	2.55*
解離	6.7(3.19)	6.3(3.23)	6.3(3.42)	<i>n.s.</i>
分裂	7.4(3.56)	7.3(3.53)	8.6(4.38)	<i>n.s.</i>
合理化	11.4(2.98)a	10.6(2.76)b	10.2(3.23)b	6.22*
身体化	8.1(3.91)a	9.7(4.19)b	9.0(3.87)b	4.58*

注：同じアルファベットは多重比較で同じグループに所属することを示す。

** $p < .001$ * $p < .05$

$< .01$; $F(2,392) = 2.55, p < .05$; $F(2,392) = 6.22, p < .05$; $F(2,392) = 4.58, p < .05$ 。Tukey の HSD 法を用いた多重比較の結果、合理化以外の投影、受動攻撃、行動化、隔離、価値下げ、自閉的空想、身体化において安定型の愛着スタイルの人は、回避型や両価型より未熟な防衛機制が有意に低かった。回避型と両価型の間には有意差は見られなかった。合理化では、不安定型に比べ安定型の方が有意に高いことが示された。（Table 5 参照）。性別においても主効果がみられたが上記の t 検定と同じであった（Table 2 参照）。

IV. 考 察

本研究の目的は、大学生の攻撃性を愛着スタイル及び防衛機制との関連から検討し、1. 攻撃性と防衛機制は深く関連している、2. 愛着スタイルと攻撃性及び防衛機制には関連があり、愛着スタイルが不安定な人ほど攻撃性及び未熟な防衛が高い、という 2 つの仮説を検証することであった。

まず、仮説には含めていなかったが、本研究で得られた攻撃性と防衛機制における性差の結果について考察する。本研究では、男性は、攻撃性の身体的攻撃、言語的攻撃、間接的攻撃が有意に高く、防衛機制では、受動攻撃、価値下げ、否認が有意に高い結果を示した。身体的攻撃が高いという結果については井ノ崎・野坂（2009）の研究でも男性の方が直接的な攻撃が表出する傾向が高いことを示唆しており、本研究の結果は一致するものであった。言語的攻撃も女性よりも高い傾向を示したが、男性の方が、言語的攻撃が強いと短絡的に結論づけるのは避ける必要がある。なぜなら言語的攻撃の項目は自己主張と関連した項目が多いため、男性の方が自己主張できているという可能性を示唆しているとも考えられるからである。間接的攻撃において、男性の方が高いという結果は先行研究とは逆であった。井ノ崎ら（2009）の研究では女性の方が間接的攻撃のかたちを取ることが多いと報告されている。これは、近年話題となっている「男性の女性化」が原因ではないかと考える。深澤（2009）は男性の「男らしさ」の欠如を指摘しており、湯川（2009）は攻撃性の発達と「男らしさ」の獲得が深く関わっていることを報告している。昨今、洗顔フォームに化粧水、メイクや美容整形など、見た目には女性と同じく気を遣う男性が増加してきていることは、古くからの性別役割を払拭させ、精神面でも女性に近づいてきているために女性を使うとされる間接的攻撃を男性も同様に使うようになったのかもしれない。この点に関しては、今後研究を積み重ねていく必要があるだろう。

本研究では防衛機制の受動攻撃や価値下げや否認において男性が有意に高かった。受動攻撃、価値下げ、否認が高かったことは「男性の女性化」が関連していると考

えられる。受動攻撃の質問項目は「もし上司が私をいらさせたら、仕事でわざとミスしたりゆっくりやったりして仕返しする」など、間接的な攻撃項目と類似している。価値下げの質問項目は「とても内気な人間だ」などがあり、これは深澤（2009）が説明しているように、草食系男子という自信や積極性がない男性が増加しているということが挙げられる。また、否認の質問項目が「不愉快な事実を、それがまるで存在しないかのように無視する傾向がある、と人から言われる」などの現実逃避と類似した内容であることから、男らしさの欠如が関連しているのではないかと考える。

女性は、いらだちの攻撃性が高いという結果が示された。防衛機制では置き換えや身体化において女性の方が高かった。これは井ノ崎ら（2009）の研究でも報告されていたように、女性は攻撃的であってはいけないというジェンダースtereオタイプの刷り込みが影響していると考えられる。そのため、攻撃性では、直接相手に苦痛を与えるわけではないが、自己の内に攻撃性を秘め、「いらだち」として攻撃性を表出する傾向が高く、また、防衛機制では、葛藤状況に陥った時に直接発散しない分、何かに置き換えたり、自己の内におさめることで身体に表れるのだと思われる。

次に、本研究の2つの仮説に対する結果について考察する。未熟な防衛総得点と攻撃性総得点は弱いながら正の有意な相関が示された。このことから、未熟な防衛機制が高ければ、攻撃性が高くなることが認められた。各下位尺度の相関分析から、攻撃性下位尺度の敵意が有意な相関が出た未熟な防衛スタイルの下位尺度全て（行動化、投影、受動攻撃、価値下げ）と中程度の正の相関を示した。このことから、大学生において未熟な防衛は敵意的攻撃として表出されやすい可能性が示唆された。また、未熟な防衛スタイルの「傷つけられると、あからさまに攻撃的になる」という行動化が、すべての攻撃性下位尺度と有意な相関関係を示した。つまり、人は自己が傷つくのを避けるため、自己を苦痛から防衛するために攻撃的になる可能性が明らかになった。以上により、攻撃は自己を守るための手段として用いられる可能性があると考えられる。これらの結果により、攻撃性と防衛機制は深く関連しているという仮説1は支持された。

愛着スタイルと攻撃性の関連については、敵意・いらだち・間接的攻撃の下位尺度が愛着スタイルと関連を示したが身体的攻撃・言語的攻撃とは関連を示さなかった。本研究は大学生が対象であるため、反社会的だとされる直接表に出る攻撃行動（身体的攻撃や言語的攻撃）は表出されること自体少なく、関連を示さなかったのだと思われる。関連を示した攻撃性下位尺度において愛着不安定型の人は愛着安定型の人よりも攻撃性が高いことが示された。この結果は先行研究（尾崎・杉本、2007）

と一致するものであった。

愛着スタイルと防衛機制との関連についても、身体化、合理化、置き換え、自閉的空想、価値下げ、隔離、行動化、受動攻撃、投影の未熟な防衛下位尺度と愛着スタイルとの関連は見られたが、否認、解離、分裂とは関連が見られなかった。合理化以外の下位尺度において安定型の人よりも不安定型の人の方が高いことが示された。以上により、愛着スタイルと攻撃性及び防衛機制には関連があることと、愛着安定型の人より愛着不安定型の人の方が攻撃性及び未熟な防衛が高いことが示され、仮説2は概ね支持されたと言える。しかし、合理化だけは愛着安定型が不安定型の人より高いという結果を示した。

愛着安定型の人には自己に対しても他者に対してもポジティブなイメージを持っているため、他人に敵意を感じたり、自己を防衛したりする機会が愛着不安定型の人よりもずっと少ないと思われる。その少ない機会において、愛着安定型は「合理化」という防衛機制を比較的良く使うことが本研究では示された。使用した防衛機制の尺度は一定の妥当性がある（蓮花、2008）とは言われているが、「合理化」の項目を見てみると、「やる事には何でも、正当な理由を見つけることができる」「物事がうまくいかない時にはもっともな理由がある」の2項目で、それほど未熟な防衛機制とは思われない。今後、「合理化」が本当に未熟な防衛機制と言えるのかどうかの吟味が必要である。

人は他者との関わりにおいて自己が傷つくのを防ぐために他者からの攻撃を避け、自己を防衛する手段として攻撃を用いる可能性があることが本研究で明らかとなった。人間の攻撃と防衛という一見相反するものの実態は密接に関わっていると言える。しかし、前述したように、攻撃性は多くの面からなる複合的な特性であるため、今後さらに研究を進めていく必要がある。また、本研究では男女のサンプル数に大きな差があったため、本研究で得られた攻撃性や防衛機制の性差の結果の解釈は慎重であるべきである。今後の研究では男性のサンプル数を増やして追試する必要がある。最後に、本研究の対象者は青年期の大学生に限られているため、今後は同年代の社会人や、幅広い年齢層を対象に研究することでさらに攻撃性と防衛機制について明らかにしておくことができると考える。

引用文献

- 朝長昌三・福井昭史・地頭菌健司・中村千秋・小原達郎・柳田泰典（2010）. 大学生の攻撃性-1年生の攻撃性を中心にして-. 長崎大学教育学部紀要, 教育科学, 74, 33-38.
- 深澤真紀（2009）. 草食男子世代-平成男子図鑑-.

- 光文社知恵の森文庫。
- 井ノ崎敦子・野坂祐子 (2009). 大学生における加害行動と攻撃性との関連 学校危機とメンタルケア, 2, 73-85.
- 工藤晋平 (2002). 見立てにおける愛着理論の観点の適用について-おそれ型の事例を通しての試論-. 九州大学心理学研究, 3, 129-136.
- 工藤晋平 (2006). おそれ型の愛着スタイルにおける攻撃性の抑圧-P-F スタディを用いた検討. 日本パーソナリティ研究, 14, 161-170.
- 中西公一郎 (1998). The Defense Style Questionnaire 日本語版 (DSQ 42)-日本での防衛機制論研究のために-. 社会学研究科紀要, 47, 27-33.
- 大淵憲一・北村俊則・織田信男・市原真紀 (1994). 攻撃性の自己評定-. 文献展望季刊精神科診断学, 5, 443-455.
- 尾崎康子・杉本宜子 (2007). 青年期における愛着と攻撃性との関連. 富山大学人間発達科学部紀要, 2(1), 37-45.
- 蓮花のぞみ (2008). 青年期と成人期における愛着スタイルと防衛スタイルの関連性. 生老病死の行動科学, 13, 3-13.
- 奏一士 (1990). 敵意的攻撃インベントリーの作成. 心理学研究, 61, 227-234.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度・成人版愛着スタイル尺度作成の試み. 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- 湯川隆子 (2009). P-F スタディにみる社会的表象としての攻撃反応のジェンダーバイアス. 奈良大学紀要, 38, 171-206.